



## 日本人が知るべき親日の歴史（講演録）

当学会会員 越 純一郎

### 越 純一郎（こし じゅんいちろう）略歴

日本安全保障・危機管理学会会員。2022年、同学会賞受賞。1978年、東京大学法学部卒業。10数年にわたり、ニューヨークの国際金融市場で活躍。NHKドラマ「ハゲタカ」の主人公のモデルとして知られている。

法務省「外国弁護士制度研究会」委員、人事院公務員研修所講師、バンクタイ（タイ王国の政府系金融機関）顧問、ビジネス・スクール教員等を歴任。現在、(株)テイク・グッド・ケア代表取締役、(株)Eパートナー取締役。

本稿は、日本安全保障・危機管理学会の学会設立20周年記念セミナー（2024/5/14）における私の講演「日本人が知るべき親日の歴史」の講演録である（文体は常体に変換）。

紙幅の制約から意を尽くさない部分もあるが、本講演を録画した動画は、下記URLのサイトでご覧頂くことができる。  
<https://www.youtube.com/watch?v=AiMf3UUz4CE>  
（「第72回 安全保障・危機管理セミナー 講師 越純一郎」を検索ワードとする検索によって、上記URLに到達可能）

また、講演資料（PDF）を入手されたい場合は、学会事務局にご連絡されたい。

### 目次

- 第1部 親日観とソフトパワー
- 第2部 ポーランドの親日観
- 第3部 インドネシアの親日観
- 第4部 外交・安全保障と親日観

## 第1部 親日観とソフトパワー

### (1) ソフトパワーとハードパワー

本日のセミナーの一人目の講演者である坂梨弘明氏（航空自衛隊 航空幕僚監部 防衛部長 空将補）による御講演「航空自衛隊の現状について」は、ハードパワーに関する講演であった。それに対し、本講演「日本人が知るべき親日の歴史」は、ソフトパワーを論じるものである。

ハードパワーとは、次のように定義できる。

**軍事力や経済力による**

**強制、威迫、買収等によって**

**自国にとって望ましい状況を実現する能力**

一方、ソフトパワーは、次のように定義される。

**何らかの「魅力」、「相手からの感謝/尊敬/憧憬」、「政策の合理性/道義性や価値観に関する共感」を通じた感化力・影響力によって、自国にとって望ましい結果を引き出す能力**

即ち、ソフトパワーは、目的達成のための手段が、強制（ムチ）でも利益供与（アメ）でもなく、要は、相手国が日本を好きなので、日本にとって好ましい展開になるというものである。この意味では、**親日国の親日観こそ、最も典型的で、最も重要なソフトパワー**である。

### ソフトパワーの提唱者 ジョセフ・ナイ（Joseph Nye）

ソフトパワーの概念・定義は、米国の安全保障関係の専門家であるジョセフ・ナイ氏が1990年に提唱し、現在もそれが踏襲されている。

ナイ氏は、ハーバード大学行政大学院（Kennedy School）の学長を務めた研究者であり、同時に、国務次官補佐（Deputy to the Undersecretary of State）、国家安全保障会議（National Security Council）議長などを歴任した外交の実務家でもあった。2023年には来日して、小泉悠氏（軍事研究家、東京大学先端科学技術研究センター専任講師）との対談、講演を行っている。

ナイ氏も述べている通り、ソフトパワーは国家レベルだけでなく、民間も含めた「国益全体の観点から」見るべきものである。

例えば、ある商社マンが語っていたことであるが、「中国人は、当社がミスをすると、ここぞとばかりに攻撃してくる。しかし、台湾人は、当社に非がある場合にさえ、何とか解決できるように一緒になって考えてくれる。」という。これこそ、

まさしくソフトパワーである。諸外国との交渉、外交がこのようであったら、それが日本の国益を高めることは明らかである。

## (2) 日本におけるソフトパワー研究の貧困

### (2)-1 ソフトパワー研究の不活発

#### 研究者がいない、論文もごくわずか

残念ながら日本のソフトパワー研究は未発達である。高見澤将林氏(前防衛研究所長、前軍縮大使)によると、2023年現在、防衛研究所にはソフトパワーの担当者はいないそうである。

また、同氏はソフトパワーに関する論文を集めてくれたが、その数は片手の指の数にも満たなかった。

### (2)-2 親日観をソフトパワーとして論じた例は見当たらない → 待ち望まれる実証研究の蓄積

これは、日本のソフトパワー研究の貧困を如実に示している。そもそも、ソフトパワーの定義からして、親日観こそが最も典型的で重要なソフトパワーの源なのに、そう論じる論考は見あたらないどころか、ソフトパワーの主たる源泉は「アニメ」や「ODA」だとする例もある。

これらの原因には、日本における「ソフトパワー

研究の立ち遅れ」と、「親日観/親日国研究の立ち遅れ」の両方があるのではないかと。

これまでのところ、ソフトパワーに関しても親日観に関しても、実証研究の蓄積は乏しく、体系的なフレームワークも構築されていない。特に、ソフトパワー関係では、研究らしい研究は未だほとんどなく、ごく少数の概念的/思弁的な論考が存在するに過ぎない状態である。

### (2)-3 親日観の真の源

#### A 歴史的理由 (Historical Events)

#### B 日本人の徳性 (Integrity)

今後の実証研究の蓄積によって明らかにされていくであろうが、日本のソフトパワーとして最も重要な親日観の真の源は、この2つである。

#### A 歴史的理由 (Historical Events)

- ・親日国の多くには、「日本に助けられた」といったような、様々な歴史的事実が存在する。
- ・そうした歴史上の出来事は、日本人の側が無知・無関心であるために認識不足であっても、相手国にとっては極めて重要であって、学校教育の中で語り継がれている例などが、多く見られるのだ。
- ・これについては、表1を参照して頂きたいが、

表1 親日観を生んだ歴史上の出来事 (Historical Events) の例

台湾	・後藤新平による、台湾の国家としての基礎の構築 ・八田與一による烏山頭(うさんとう)ダム建設
ベトナム	日露戦争の日本の勝利に触発されたファン・ボイ・チャウによる東遊(ドンズー)運動
インドネシア	インドネシアの独立記念日は、日本の年号で刻まれている【第3部で詳説】
ベルギー	第一次大戦で苦戦するベルギーを鼓舞・支援した日本を、ベルギーは関東大震災後、国を挙げて支援。日本の皇室とベルギー王室は他に例を見ない親密さ。
ポーランド	シベリア孤児救出事件(1921~21)【第2部で詳説】
フィンランド	フィンランドとスウェーデンとの間のオーランド諸島領有権争いを、国際連盟の事務局次長であった新渡戸稲造が画期的な方法で解決(1922)。日露戦争の日本の勝利にフィンランドは歓喜。
イラン	日章丸事件(出光興産によるイラン原油輸入が、戦後のイランの国作りに貢献)
トルコ	イラン・イラク戦争時にテヘランに取り残された邦人数百人を、トルコ航空機が救出。その背景には、明治時代のエルトゥールル号事件。
<b>日露戦争の日本の勝利(1904~05)</b> 人類史上、初めて有色人種が白人国家を打ち破った戦争。ネルー、ガンジー、孫文、毛沢東、若き日のケマル・アタテュルク(トルコ初代大統領)などが、日本の決定的勝利に熱く歓喜した。	
<b>大東亜戦争における日本の勇戦によってアジア諸国が独立</b> インドネシア、インド、マレーシア、フィリピン、スリランカ、ベトナムほか	
<b>日本の高度経済成長</b> アジア諸国に直接的に経済的恩恵を実現するとともに、経済/ビジネスにおいても白人を凌駕できることを事実で示した。	

そのなかの代表的な例として、ポーランドとインドネシアを、第2部、第3部で詳述する。

## B 日本人の徳性 (Integrity)

- ・「日本人は約束を守り、誠実である」「日本人は礼節と正義を重んじ、勤勉で、規律正しい」。こういった日本人の徳性が、実は日本に対する評価に決定的な影響を与え、日本に対する好感度を高めている。このことは、同じ日本人の中でも、海外に永住されている方々などから良く聞かれるように思われる。
- ・こうした徳性を、本講ではIntegrityという英単語で表すこととする。これについては、第4部で詳述する。

## 第2部 ポーランドの親日観

ポーランドは、親日観を生じたHistorical Eventsに関する好例の一つで、ソフトパワー研究上では、欠すことができない。

### またとないほどの親日国 ポーランド

日本の外務省のHPによれば、「ポーランドの国立4大学の日本語専攻の定員は600人、その他に約60の機関や学校で日本語を学ぶ定員は約4500人」「国中で日本語弁論大会が盛ん」「日本の武道も盛んで、特に空手は同国で6番目の人気スポーツ」だという。実際に、ワルシャワ大学の日本語専攻は、入試倍率が30倍にもなる超難関である。

ワルシャワでは、在留日本人の数よりも、和食店の数のほうが多いという。同国の国立歌劇場の唯一の常任指揮者を、日本人の今村能氏が務めていたこともある。また、在日ポーランド大使館の外交官の多くは日本語が堪能である。

英国留学中の日本人に、ポーランド人の数学教師が、「自分は親から、世界のどこかで日本人に出会ったら、できるだけ親切にして恩返しをしてほしいと言われてきた」と、親身に世話をしてくれたという逸話もある。

2011年3月の東日本大震災直後のポーランド国会では、討論に先だち、「日本の地震と津波の

犠牲者の追悼のために全議員が起立して黙祷」し、続いて「日本国民への連帯の表明」を全会一致で採択した。

こうしたことの理由は、100年前に遡る。

### 日露戦争とピウスツキ元帥

日露戦争開戦後の1904年7月、ポーランドからヨゼフ・ピウスツキ元帥（後の初代国家元首）が訪日し、帝国陸軍と会談したことは、ポーランドでは広く知られている。翌1905年、日本がロシアに勝利したことは、100年以上もロシアの圧政下で、独立を失っていたポーランドにとって、驚天動地のことであった。東洋の小国日本が、ヨーロッパ最大の陸軍国ロシアを破り、バルチック艦隊を壊滅させたのだ。

日露戦争で捕虜となったロシア軍には、多くのポーランド人兵士も含まれていたが、日本は、ポーランド側の要請を受けて、ポーランド人捕虜をロシア人捕虜とは切り離し、松山市内15か所の収容施設で、1906年2月まで、手厚く待遇した。「外出もかなり自由で、地元から心温まるもてなしを受けた」と伝える文献もある。

初代国家元首となっていたピウスツキ元帥は、1925年、日露戦争で功績のあった日本軍将校の叙勲を決定し、1928年、ポーランドの在日武官のヴァツワフ・イエンジェイエヴィッチによってその授与が行なわれた。

### 1919年、日本・ポーランド国交樹立

ロシア革命の混乱の中で、ポーランドは独立を宣言した。その数か月後の1919年3月に、日本はポーランドの独立を承認し、国交を樹立した。同年7月、ワルシャワ大学には日本語科が設置された。

国交100周年の2019年、即位の礼のため訪日されたドゥダ大統領夫人は、「100年前、日本はアジアの国のなかで、最初にポーランドの独立を認めてくれた」と、両国の歴史を踏まえたスピーチをされた。

### 日本によるポーランド孤児のシベリアからの救出

ポーランド独立運動の志士と家族はシベリアに

流刑され、1920年には15～20万人にのぼっていた。そこに腸チフスが流行し、親を失った孤児たちは悲惨な状況になった。

ポーランド側は、シベリア出兵中の米、英、仏、伊に孤児救出を要請するも、全て拒絶された。だが、最後に要請を受けた日本は、17日後に孤児救出を決定してポーランド側に伝え、日本赤十字社と陸軍が、1920年7月より数次にわたってポーランド人孤児765人を日本に救出した。

栄養失調や腸チフスなどで苦しむ孤児たちを、日本は朝野をあげて温かく迎え、慰問品や寄贈金も次々と贈られ、貞明皇后から4回にわたり資金が下賜された。

健康と朗らかさを回復した孤児の全員は、日本の船で無事に祖国ポーランドに帰国した。

その経緯は日本赤十字のHPに詳しいが、ポーランド国内でも良く知られていることは言うまでもない。孤児たちが、日本でいかに優しくされ、癒され、日本の言葉や歌を覚え、忘れえぬ暖かい思い出を抱いたかは、今もポーランド人の胸にある。

阪神淡路大震災後の1996年、被災児30名がポーランドに招かれ、各地で歓待を受けた。帰国前のパーティーには、75年前にシベリアから救出された孤児4名が出席していて、日本の震災孤児の一人一人にバラの花を渡した。その時、会場は万雷の拍手に包まれた。

これを伝える兵藤長雄元ポーランド大使の「シベリアからの奇跡の救出劇」(『歴史街道』2014/3)を紹介するサイトは、「シベリア孤児を慈しんだ大和心に、恩を決して忘れないポーランド魂がお返しをした」と結んでいる。

2018年、ポーランドに「シベリア孤児記念小学校」が開校した。同校は公立学校ではあるが、1年生から日本の文化と日本語を学び、君が代も習うという。

### 杉原千畝とポーランド

駐日ポーランド大使館は、杉原千畝の資料を展示することがある。「東洋のシンドラー」と呼ばれた杉原千畝が「命のビザ」で救ったユダヤ人たちの多くは、国籍はポーランドだったのだ。その

子孫は、現在25万人に上る。

2008年、ポーランド政府は、杉原千畝に対してポーランド復興勲章を授与した。

### ポーランドを第二の日本に

共産体制の崩壊後、レフ・ワレサ第二代大統領は、1990年の就任演説で、「ポーランドを『第二の日本』にする」と高らかに述べ、国民はそれに喝采した。

ワレサ政権で、神業のごとき経済改革を断行したバルセロビッチ財務大臣は、日本の戦後復興の調査のために来日し、日本興業銀行などを訪れている。

戦後、ポーランド側はスターリンに支配され、日本もマッカーサーに占領された。ところが、日本は2回の被爆まであったのに、戦後19年にして東京オリンピックを実現し、更にその15年後には、ハーバード大学のエズラ・ボーゲル教授が「ジャパン・アズ・ナンバーワン」を出版して、世界最強の経済大国は日本だと論じた。

日本の戦後復興の成功の歴史は、共産体制の崩壊後にテイク・オフを目指すポーランドにとって、驚異の目で見える成功モデルだったであろう。その日本は、日露戦争、シベリア孤児救出、杉原千畝と、常にポーランドの側に立ち、何らの見返りも求めなかった。

## 第3部 インドネシアの親日観

インドネシアも親日観を生んだHistorical Eventsに関する好例の一つで、ソフトパワー研究上で、欠かすことができない。

### (1) 日本による植民地支配からの解放

インドネシアの歴史教科書では、  
1942年2月に侵攻してきた日本軍を  
「解放軍」と呼んでいる

インドネシアの親日の源流は、350年にわたって同国を支配したオランダを日本が打ち破り、植民地支配を終了させたことにさかのぼる。真珠湾攻撃の3か月後、日本はインドネシア侵攻を開始。

1942年2月14日のパレンバン空挺作戦において、「空の神兵」がオランダの製油所を無傷で確保し、そしてオランダは、3月12日に全面降伏した。

日本軍は、軟禁されていたスカルノやハッタなどの民族主義活動家を解放し、禁止されていた「インドネシア」という呼称を解禁した。さらにインドネシア語が初めて公用語となり、大学教育にも導入された。

### インドネシアの覚醒と日本

日本の軍政下で、日本に対する反乱蜂起もあった。しかし、それでも親日家が圧倒的に多いのは、日本の勇戦を見たインドネシアの人々が「アジア人は劣っていない」「自分たちにも独立する力がある」と自信を持ち、また、「戦う精神」を獲得したためであった。

独立宣言をラジオ放送したユスフ・ロノディプロ氏（後年は、各国大使を歴任）は、「日本だけがアジアを支配する白人に立ち向かった。真珠湾攻撃をアジア人として誇らしく思い、自分自身の中の強さを感じた。アジアは劣っていないと思った。」と語っている。

### 歴史を踏まえたインドネシアの教育

インドネシアでは小学校から高校まで全ての歴史教科書で、インドネシア独立のためにいかに日本が貢献したかを説明している。特に、日本の軍政が残した「教育システム」「軍事組織」「行政機構」が独立後の同国を支えたことを教えている。

在日インドネシア人実業家のアリ・ウィドド氏は、「それで、日本への感謝、尊敬が続いている」と語っている。

### 日本将兵も一緒に戦った独立戦争

1943年、日本軍の協力の元にインドネシア人の指揮官が率いる民族軍「郷土防衛義勇軍(PETA)」が組織され、それは事実上、独立戦争の中核戦力となった。

その独立戦争では、多量の日本の武器が使われ、しかも、日本軍の将兵数千人が加わって一緒に戦った。今、その多くは同国各地の英雄墓地で眠っている。

独立戦争を共に戦った日本将兵のうち約1000人はその後も現地にとどまり、数百人がスカルノ大統領の時代にインドネシア国籍を与えられている。同国の女性と家庭を築いた方々も多い。(ちなみに、戦時中にインドネシアから日本に留学した南方特別留学生等の方々の多くも日本人女性と結婚されている。)

21世紀を迎えても、インドネシアの新聞各紙は、独立戦争に参加した日本人に関する記事を、毎年、掲載している。たとえば、2014年8月27日のジャカルタ・ポストのサイトは、インドネシア独立のために戦ったオノ・シゲル氏が95歳で亡くなったことを伝えた。

また、東京の青松寺には、スカルノ大統領が独立戦争に参加した日本兵2名に贈った記念碑があり、「市來龍夫君と吉住留五郎君へ 独立は一民族のものならず 全人類のものなり スカルノ」と刻まれている。

### 日本の年号で刻まれたインドネシア独立記念日

日本の敗戦直後の8月17日朝、スカルノは独立宣言を読み上げた。スカルノとハッタ（初代副大統領）が署名した独立宣言の日付は「05年8月17日」である。この「05」とは「皇紀2605年」のことである。つまり、インドネシア独立記念日は、日本の年号で刻まれたのだ。

今日、ジャカルタのムルデカ広場（=独立広場）に立つ、独立戦争の国民的英雄 スディルマン将軍の銅像の台座に刻まれた独立記念日の年号も同じだ。

2011年、そのスディルマン将軍の像がプルノモ・インドネシア国防相より日本に寄贈され、東京裁判が行われた建物をにらみつける場所に置かれた。独立記念日にそこで行われる献花式には、駐日インドネシア大使は、最も忙しい日であるのにもかかわらず、自ら参加されている。

### (2) 親日観の重要な根源

#### A 日本の経済力/経済発展

#### B 日本人のIntegrity

この2つは、インドネシアだけでなく、いかなる

親日国においても親日観の重要な根源になっている。

## A 日本の経済力/経済発展

確かにアジア諸国の多くは、「日本の勇戦なくしては、自国の独立は、大幅に遅れたか、或は不可能だった」と認識している。だが、それでも、アジア諸国の首脳たちには、次のように言う方々が多いという。

### アジアに対する日本の最大の貢献は戦後の日本経済の発展である

なぜならば、日本の高度経済成長は、アジア諸国に経済的恩恵をもたらしただけでなく、産業面においても白人支配を覆し、「アジア人でもできる」と実証したからである。外交交渉等における発言力も、根本的には、経済力の裏付けあつてのことではないか。

## B 日本人のIntegrity

どの国でも、親日観の根底には、次のような日本人の徳性に関する理解と評価がある。

約束を守る	高潔
誠実	礼節
清廉	責任感
礼儀正しい	勤勉
規律正しい	世のため人のため

どれほど日本からのODA等があつても、Integrityが無ければ、諸国からの評価や尊敬はあり得ないだろう。

### (3) アジアを思う日本の心

日本人のIntegrityの一環と言えようが、かつて日本にはアジアを思う心と理想があり、多くのアジア諸国の親日観の源となった。インドネシアも同じである。

## 興亜主義

かつて日本に、興亜主義という活動/思想があつた。たとえば、明治の指導者を動かした興亜主義者杉山茂丸を祖父とし、アジア解放の理想の

ために資金調達に努めた杉山泰道を父とする杉山龍丸は、インド・パンジャブ州の飢餓救済を自らの使命と思い定め、ついに「インド緑化の父」と呼ばれるに至った（渡辺利夫「台湾を築いた明治の日本人」P.53）。先人の偉業である。

当然、かかる先人たちにはアジアの方々への思いがあり、対等と相互尊敬という基礎があつた。戦時中に南方特別留学生等として日本で学んだインドネシアの方々の、「私たちは敬意をもって扱われた」「非常に良い歓迎を受けた」「差別などなかった」「嫌な思いなどしたことはなかった」などの発言を伝える文献もある。

では現在はどうか。インドネシアの皆さんに対して、自然な敬意をもって接しているか。インドネシアとその歴史を理解する努力は十分か。これらのことは、日本の矜持と文化度の問題であり、日本の国益にも関わる重要な問題である。

## パパ・バリ (バリ島の父) 三浦襄

上記の意味で、三浦襄をあらためて思い出したい。インドネシアがオランダの植民地であつた1930年よりバリで事業を営んでいた三浦襄は、神田出身の熱心なクリスチャンで、開戦後はアジア解放の理想のため、海軍民生部の顧問となり、軍と住民との間の問題にとりくんだ。

人を愛し正義を貫く人だつた三浦を、「親切で毅然。一度で胸に焼き付く人だつた」と語る文献もある。彼は、敗戦の翌月、日本が約束していたインドネシア独立を果たせなかったことを詫びて、ピストルで自決した。「私の魂はこの国で生き続け、独立を見守る」と言い残した三浦襄は、今日も「バリ島の父」と呼ばれている。

バリの英雄墓地にも、インドネシア独立戦争で没した多くの日本兵の墓があり、いつも綺麗に清掃されているようだ。「訪れるたびに、誰かのために命懸けで戦った先人達を日本人として誇りに思う」と現地の日本人は語っていた。

### (4) 親日観は、現代的課題と共に

親日国との歴史は、必ず現代的課題と共に考えるべきだ。新しい時代には、新しい努力が必要なのである。

1970年代の東南アジアで、日本の経済進出による摩擦があったが、インドネシアではこれを思い出す人もなく、もはや懸念はない。だが、インドネシアの日本企業は約2000社で、タイの6000社とは大差がある（人口は、インドネシアがタイの約4倍）。これは課題かもしれない。

インドネシアの最大の貿易相手国は中国で、日本は2番目ながら中国の3割程度だ。中国は資金面を梃子に、各国に対し侵略するがごとき進出を活発化しているが、インドネシアも例外ではなく、インドネシア新幹線計画では日本は中国に敗れた。

だが、多くのインドネシア人は、そうしたのは過ちだったと考え、閣僚の顔触れは、親中派から親日派に変わった。一方、日本企業の努力と円借款で2019年に開業したジャカルタの地下鉄は、定時運行率がほぼ100%で、毎日10万人を運び、経済発展と渋滞解消に大いに貢献し、日本の好感度を高めている。

#### 新しい時代には新しい努力を

2020年10月、菅首相は初の外国訪問としてインドネシアを訪れ、ジョコ・ウィドド大統領と会談した。中国包囲網を意識した内容であった。

しかし、今後、インドネシアが常に自動的に、無条件で、「日本を戦略的パートナー」とすることはありえない。なぜなら、インドネシアは、政権ごとに、戦略的パートナーを選定するからである。初代スカルノ大統領の戦略的パートナーは旧ソ連、第二代スハルト大統領はアメリカ、第5代メガワティ大統領（スカルノ大統領の長女）は中国を戦略的パートナーとした。

つまり、新しい時代には、常に新しい努力が必要だと考えなければならないのだ。

### 第4部 外交安全保障と親日観

本講の最後に、親日観/親日国をソフトパワーとして位置付け、それを外交・安全保障に生かす実例として、下記の2事項を説明したい。これらは説明であるとともに、提案でもある。

#### A 日本人のIntegrity – 親日性の真の源

#### B Advanced Bridging Diplomacy (高度「橋渡し」外交)

#### A 日本人のIntegrity – 親日性の真の源

「親日観の源」「日本のソフトパワーの源」として最も重要なのは、日本人のIntegrity（徳性）である。

#### 「日本人のIntegrityの自覚」が 青少年教育に生かされたエピソード

明治大学ラグビー部が三連覇を果たした際の主将であった瀬下和夫氏が、次のように語ったことがあった。

オーストラリア遠征の際に、次の訓示があった。  
相手国の人たちは、お前たちを見て、  
日本人は、こういう人たちだと判断する。  
だから、その意味で、  
お前たちは日本の代表なのだ。  
決して、相手国の人に見られて、  
恥ずかしいことがあってはならない！  
こう言われて、私たちは、背筋が伸びました!!

これは親日観の根源にある日本人の徳性（Integrity）が青少年教育に生かされた例で、今後の広報文化外交（Public Diplomacy）を考える際にも参考にしたい。

#### B Advanced Bridging Diplomacy (高度「橋渡し」 外交) (これを仮に ABD と呼ぶこととする)

#### ツベコベ嫌悪

ABDを語る際には、まず、大部分の諸国には「ツベコベ嫌悪」というべき傾向が根強いことを説明する必要がある。

「ツベコベ嫌悪」とは、米国や国際機関から、「あーしろ、こーしろ」と、ツベコベ言われることに対する反発/苛立ち/嫌悪である。（また、メンツは命より大事、という国もある）。たとえば、代表的な親日国であるトルコでは、政治家でも、官僚でも、インテリでも、庶民でも、「米国にツベコベ言われて、アタマに来る！」という傾向が、常に極めて（！）強いのだ。

## ツベコベ嫌悪に関する日本人の無知/無頓着。

### 一方、「安倍外交はツベコベ嫌悪に向き合った」。

日本人は、米国に対して常に融和的・同調的であり、国連やIMFのような国際機関に対しても同様である。

だが、それは世界的には例外的なことだと認識しておく必要がある。つまり、世界の大部分の国は、それとは逆なのである。即ち、ツベコベ嫌悪が強い国が多いのだ。

そのため、日本人/日本外交は、往々にして「他国の心情を理解していない」という結果に陥りかねない。そして、それを日本人自身が気づいていない、自覚していないことも多い。

一方、安倍政権で防衛省の最高幹部を長年にわたって務めた方は、「安倍首相は、諸国のツベコベ嫌悪を受け止めようとしていた」と語っている。安倍外交の神髄には、これがあつたと認識しておくべきであろう。

### ABD (高度「橋渡し」外交) が期待される状況とは

「ある親日国」(①) が、「米国や国際機関」(②) に対して強いツベコベ嫌悪を有しているときに、日本は、①とも、②とも、良好な関係にあるので、日本がABDを遂行することが期待される。

こうした状況は、極めて頻繁に見られる。なぜならば、日本は米国や国際機関とも良好な関係にあり、一方で、親日国の多くは、米国や国際機関に対して、強いツベコベ嫌悪を有しているからである。

以下に、典型的とも言える例を、3つ示す。

#### 例1 日本のABDが期待されたイラン

イランは、伝統的な親日国 (←日章丸事件)



2019/4、イランの核開発問題で情勢緊迫。  
イラン・イスラム革命防衛隊が、英国貨物船を拿捕。  
同月、米国は、イラン産原油の  
主要国への輸出を事実上禁止。  
こうした時期でも、日本の安倍首相が訪問すると、  
最高指導者ハメネイ師とローハニ大統領が大歓迎。



日・イラン首脳会議 (出典：外務省ホームページ)

日本人の大部分は認識していないようであるが、イランは伝統的な親日国である。その根源は、イランが戦後、石油資源を国有化し、国作りに着手した頃に、日本の出光興産がイラン原油を購入した日章丸事件である (ファイナンスは、主に当時の東海銀行が担当)。

そのため、イランの核開発問題で情勢が緊迫し、イラン・イスラム革命隊が英国の大型貨物船を拿捕したので米国がイラン産原油の主要国への輸出を事実上禁止した時期にも (2019年4月)、日本の安倍首相がイランを訪問すると、最高指導者のハメネイ師とローハニ大統領は大歓迎したのだった。

日本はこうした自らのポジショニングを活用して、イランと米欧等との間で、ABDを積極的に、見える形で、展開することはできなかったであろうか。

#### 例2 日本のABDが期待されたトルコ

トルコは、伝統的な親日国 (←エルトゥールル事件ほか)



トルコは、NATOの発足からの加盟国。  
そしてNATO内で米国に次ぐ軍事力。  
しかし、トルコは2019年、ロシア製の  
ミサイル防衛システムS-400を配備。

↓  
日本にできることはなかったか?

対米ツベコベ嫌悪に配慮することが、  
世界平和に貢献することを、  
アメリカに教えられるのはどの国か?

日本人の多くは認識していないかもしれないが、トルコは伝統的な親日国である。その背景にはエルトゥールル号事件 (1889) もあるが、それだけではない。

現在も、多くの国民から深い崇敬を集める初代大統領のムスタファ・ケマル・アタチュルクが、スルタン制を廃止して共和制に移行する国作りを遂行する際、幕藩体制を廃止し明治維新を成し遂げ、更に日清・日露の戦役で勝利した日本をモデルとし、明治天皇を深く崇拝していたことの影響も大きい。

また、日露戦争を指揮した乃木希典、東郷平八郎にあやかって、トルコには「ノギ」「トーゴー」と名付けられた男の子や商店は多い。高級皮革製品のブランドにも、「トーゴー」というものがある。

さらに、朝鮮戦争に従軍した延べ5万人のトルコ兵の多くが日本を訪れ、日本人のIntegrityを知り、そして、それを帰国後に国内に伝えたことの影響が大きかったと言われる。即ち、戦後の混乱期でも、日本人が有能・勤勉で、規律正しく、信義に篤く、自己犠牲を厭わない。こうした日本人こそ、「真のイスラム教徒の姿を体現している」という声は、トルコでは珍しくなかったようだ。

また、EUはトルコの加盟申請を頑として認めないが、トルコとしては、日本となら真の友人になれることの意味は非常に大きい。

さて、そのトルコは、NATOの発足時からのメンバーであり、しかもNATO内で米国に次ぐ軍事力を有している。しかし、国民の誰もが、米国に対しては、強いツベコベ嫌悪を有している。まるで国是のごとくに。

その結果、2019年に、トルコはロシア製のミサイル防衛システムS-400の配備に踏み切ってしまった。

これについて、日本にできることは無かっただろうか。アメリカとトルコの間立つ国は、日本が最もふさわしいかもしれない。アメリカに対して対米ツベコベ嫌悪について説くことができるのは、日本だけかもしれない。

**例3 日本の ABD が期待されたインドネシア**

インドネシアは親日国



1997年、アジア通貨危機の際、署名するスハルト大統領を、IMFの専務理事が腕組みして見おろす写真に、インドネシア国民は強い屈辱を感じ、強く憤激。

「どっちなんだ、はっきりしろ、というのは、インドネシア人が最も嫌うことだ」(佐藤百合「経済大国インドネシア」)



写真提供：ロイター＝共同

日本人の多くは認識していないようだが、インドネシアは伝統的な親日国である。その根源は第3部で詳説したが、キーとなる事項には下記が含まれる。

- ・インドネシアに対する、オランダによる350年以上にわたる植民地支配を日本が終了させた
- ・日本軍政下で、インドネシアの国家基盤が構築され、それが独立後の同国を支えた。
- ・インドネシア独立戦争に、多くの日本人将兵が参加して、一緒に戦った

そのインドネシアは1990年台のアジア通貨危機の際、IMFの支援を受けざるを得なくなった。だが、その時のIMFには、インドネシア国民が不必要な屈辱を感じないようとの配慮が全くなかった。署名するスハルト大統領を、IMFの専務理事が立ったまま腕組みをして見下ろす写真に、インドネシア国民は屈辱の限りを受けたと感じ、憤激した。

これによって、誰が得をしたであろうか。IMFを含め、誰も得をしていない。こうした場合に、今後、日本のABDを考える必要はないだろうか。

本講では、親日観、親日性を、ソフトパワーと外交・安全保障の観点から、論じてきた。この分野は未成熟で、論者も少ない。今後の展開に期待したい。